

氏名(本籍)	こ しま けい 小 嶋 慧 (秋 田 県)
学位の種類	博 士 (芸 術 学)
学位記番号	博 甲 第 6638 号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	橋本平八の一木彫に関する研究 －彫刻制作における精神・理論・実践の統合－
主 査	筑波大学教授 博士(芸術学) 守 屋 正 彦
副 査	筑波大学教授 柴 田 良 貴
副 査	筑波大学教授 博士(芸術学) 中 村 義 孝
副 査	東京福祉大学助教 博士(芸術学) 宮 坂 慎 司

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

本研究全体の目的は、彫刻の精神・理論・実践の統合を作品制作において成し遂げようとした橋本平八の一木彫の可能性を、理論的・実践的に究明することである。これを解き明かすための主要な研究の問いは、「木彫家橋本は、自らの精神・理論・実践の統合を図りながら、如何にして一木彫の可能性を追求し、自律的・省察的に成長を遂げたか」としている。さらに、この主要な問いの下に連なるものとして、「一木彫作家としての橋本の位置づけ」、「橋本の彫刻の精神と法則に基づく彫刻論」、「橋本の精神・理論の作品制作における実践化と一木彫としての効果的表現」に関する問いを設定し、これらの考察を踏まえた総合的な研究をねらいとしている。

(対象と方法)

先行研究などの専門文献に加え、橋本の彫刻論の原点となる遺稿集『純粹彫刻論』他の手記、日記などを読み解き、日本美術院展覧会に出品された第一課から第四課までの代表作品 11 点を中心に解釈・論考を加えている。作家自身の言説を重視し論旨が展開される本論においては、橋本の文書、手記、日記、書簡、作品、下図などの実証的な一次データを極めて重要であると捉えている。また、研究方法の偏りを避け信頼性・妥当性を高めるために、基本となる文献データに加え、橋本関連のシンポジウムや講演会への参加、遺族へのインタビューなどの実地調査も踏まえ、できるだけ多様なデータを織り交ぜ、複眼的な視点から橋本の全体像をとらえることを試みている。

(結果)

一木彫に全身全霊をささげ独自の彫刻芸術を開拓し続けた彫刻家橋本の全体像を明らかにするために、彫刻作品のみならず多種多様なデータの分析・考察による総合的研究がなされた。第 1 章では生活と制作の拠点の移動にもとづいて橋本の生涯と作品を説き、第 2 章では日本美術院展覧会と橋本への注目を高めた回顧展を軸としてこれまでの評価に論及し、第 3・4・5 章では橋本の一木彫作家としての位置づけ、彫刻論、一木彫表現の特徴について理論的・実践的に分析・考察を施している。結果として、精神・理論・実践の三位一体を果たすために実験制作に精進し、一木彫の可能性を追求しながら成長し続けた橋本の実像が体系的に

究明された。

(考察)

本研究の主要な問いに対する答えは、橋本の独自性、存在の再認識・再評価とからめて以下のようにまとめられた。第1に、日本彫刻の探求者として自らの彫刻学・精神にもとづき研究・制作を継続し進化への努力を惜しまぬ橋本は、今日芸術創作に取り組む立場から見る者に、魅力を感じさせると同時に自省を促しているとしている。第2に、橋本は作品制作の過程において、表現と法則の深化を図りながら自律的・省察的に成長した彫刻家であり、この点に橋本の再評価の意義を見出している。第3に、木という素材の変容を意識し、「仙」・「霊」や芸術の魂の表現を求めた実験制作に挑戦する中で、精神・理論・実践の統合が図られ、多くの現代彫刻家たちを共鳴させインスピレーションを与え続けていることは注目に値するとしている。第4に、橋本の彫刻精神は、気高い芸術の使命感をもって東西の芸術、思想、哲学、宗教などを意識した思索に基づくとの認識に立ち、立体・平面を問わず彼の豊かな芸術作品を総合的に再評価すべきであると結論付けている。これらと合わせて、研究データの信頼性・妥当性、研究の意義・独創性・限界、関連研究の中の位置づけ、今後の研究方向などについても考察されている。

審査の結果の要旨

本研究の特色は、橋本の作品が「一木彫」であることに着目し、著者自身も同様に一木彫を制作する立場から理論的・実践的に論じ得たことで、専門的に研究の深化が図られた点である。また、代表作品11点を一連の実験制作の軌跡として分析し、特に第四課を「仙・霊の融合表現」と位置づけたことは、新しい視点であり独創的と見なされる。さらに、先行研究に加え、これまで未読の多様なデータをできるだけ取り込み、それらすべてを織り交ぜて解釈を施したことで、より信憑性を備えた研究となっている。国内において橋本への注目が高まり評価の裏づけが求められる今日、本研究は彫刻制作における精神・理論・実践の統合という新しい視点から橋本の全体像を総合的に究明し、東西の美術史的位置づけにも言及しており、今後の近現代美術史の研究にも寄与されると思われる。これらのことは、これまで神秘不可思議な面が強調され、彫刻家としての実像が解明されず、正当な評価を受けてこなかった橋本芸術の再評価を促すことにつながる。また、西欧を意識しながらもあえて日本精神にこだわる橋本彫刻の国際的な意義を理解する本研究は、国外に向けて橋本と一木彫についての情報を発信する源になり得ると考えられる。今後、著者による橋本研究の信頼性・妥当性を高めるために、自らの木彫観をより深化させ、橋本に関わる新・旧の資料をさらに分析・活用し、継続的・発展的に研究を推し進めることが期待される。

平成25年1月7日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。